

鹿島 昌也

(埋蔵文化財センター主査学芸員)

はじめに

「中世富山城推定地」は富山市千石町から星井町にまたがる約 12 万 m²の埋蔵文化財包蔵地（以下「包蔵地」とする）として平成 5 年『富山市遺跡地図』に搭載されている。富山市街地には、この他「富山城跡」や「総曲輪遺跡」などが搭載されている。

近年の富山城址公園整備事業に伴う試掘調査や発掘調査で、戦国期の堀跡などの遺構や中世土師器・珠洲焼・茶臼などの遺物が現在の「富山城跡」本丸付近から見つかったことから、中世富山城の位置が近世富山城の下層に所在することがほぼ確定された(注1)。

このことから、包蔵地「中世富山城推定地」の名称を変更する必要が出てきた。よって、平成 25 年 3 月発行の『富山市遺跡地図』で「中世富山城推定地」から「千石町遺跡」に変更することとなった。

今回、「千石町遺跡」として搭載される包蔵地における近年の調査成果を紹介し、今後のこの遺跡のあり方や課題を提示したい。

1 試掘調査の概要

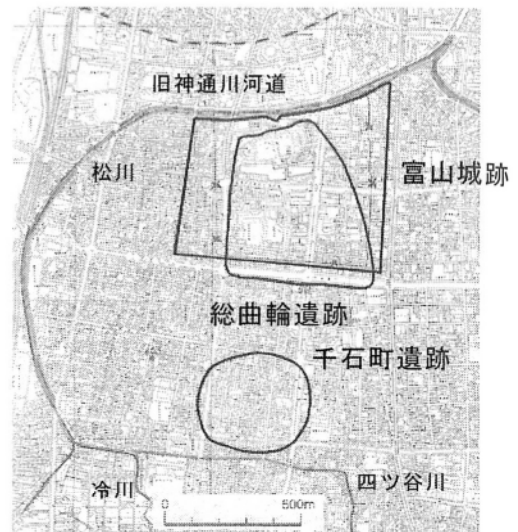
「中世富山城推定地」内では、平成 20 年以降、マンション建設や住宅新築・建て替え、駐車場造成などに伴う試掘調査が実施されてきた。いずれの調査においても、ほぼ近世以降の富山城下町に伴う遺構や遺物が出土していた。

そうした中、平成 23 年に千石町 4 丁目で実施した住宅新築に先立つ試掘調査において、近世期の遺構面の下層から中世期の遺物包含層（珠洲焼・中世土師器が出土）及び遺構面を検出し、当包蔵地内ではじめて中世期の遺跡を確認することができた。しかし、その状況から中世期に城館遺構が所在していたとは認められず、中世期(室町時代以降)の集落跡の一端が見つかったと推測される。

2 城下町遺跡の取り扱いについて

その一方で近年、城と城下町を有する都市部において、遺跡の時代範囲を江戸時代の「総構」（城下町を囲い込んだ堀や土塁）で囲われた城と城下町までを含めて包蔵地とする考え方が示されている(注2)。近隣では金沢市で平成 23 年から「総構」で囲われた城下町を全て包蔵地として取り扱うこととした。しかし、このような事例はまだ少なく、大阪市などのように城に隣接する一角のみを城下町遺跡として包蔵地の取り扱いを行っている例が多い。

文化庁は平成 10 年通知で埋蔵文化財として取り



富山市街地における主な遺跡



千石町4丁目の土層堆積状況

扱うべき遺跡の範囲として、近世に属する遺跡については、地域において必要なものを対象とすることができることとしている。今後、都市部の再開発や住宅の建て替えが進む中で、富山市においても市街地の地下1mから下に良好に残る近世の「城下町」遺跡をどう取り扱っていくべきか検討する時期に来ていると思われる。

3 「千石町遺跡」からみた富山城下町の様相

富山城下町の様子は①『越中国富山古城絵図』（江戸初期）や②『万治年間富山旧市街図』（江戸前期）③『富山城下絵図』（江戸後期）などから類推することができる。近年、江戸時代前期以降城下町の南限となっていた四ツ谷川が星井町付近で西に流れを変えているが、江戸時代初期には一番町方向に流れていたことが明らかとなった(注3)。現在の国道41号線の東側に沿うように南北方向の川筋があったとみられる。

千石町3丁目における試掘調査では、地下1~2mの黒色泥炭層中から陶磁器に混じって漆器や下駄など木製遺物が良好な状態で出土し、旧四ツ谷川のある谷筋から西に派生する小支谷の存在が推測される。

一方、千石町4~5丁目における試掘調査では、地下70cm~1m以下に江戸時代の陶磁器を含む水田耕作土層や近世陶磁器を多数含む遺物包含層が確認でき、一帯が水田だった時期や町人地や武家屋敷地だったことが推測される。

出土した陶磁器の中には「諏訪大明神」や「口つり」、「中」と墨書された越中瀬戸の素焼きの皿（灯明皿）も出土し、城下町における信仰や生活の実態を解明する上で貴重な資料も出土した。

おわりに

富山市街地が城下町であったことを知らない人が多い。今後は現在の市街地が形成される元となった城下町について遺跡調査からの解明に期待したい。

注

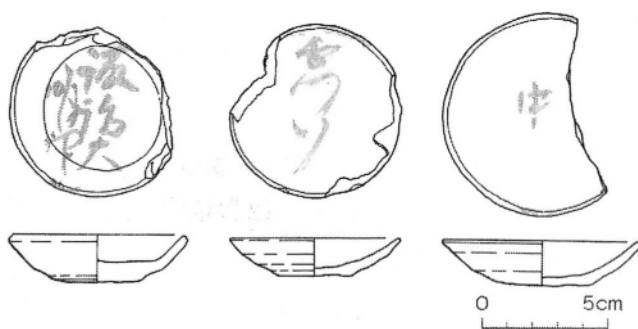
- (1) 富山市教育委員会 2004 『富山城跡試掘確認調査報告書』
- (2) 文化庁・東京都教育委員会『平成24年度第2回埋蔵文化財担当職員等講習会発表要旨』
- (3) 北日本新聞 2011年9月6日付け記事

文献

富山市郷土博物館 2005 『富山城ものがたり』



千石町3丁目の土層堆積状況
(点線から下部が谷の堆積土)



千石町遺跡から出土した遺物(一部)
(写真の左下3点は中世、その他は近世)